

会員紹介：小林 一さん

私の略歴



地域づくりプランナー・NPO 法人アジア起業家村推進機構常務理事（湘南生まれの団塊世代）

私が生まれたのは、1949年9月21日、団塊の世代です。茅ヶ崎生まれ、茅ヶ崎育ち、海の近くに住んでいたため、サーフィン歴50年のレジェンドサーファー、今も波に挑戦しています。1967年東大に入学するとすぐさま大学闘争、進学した都市工学科もノンセクトの拠点、当時は公害が問題となっていた時代で、水俣病患者の支援のために現地に行ったり、

東京での抗議行動のデモに参加したり水俣からの人たちの運転手をやったりしたものです。胎児性患者のKTさんを間近にしたときの衝撃は今も忘れません。現在放射能被害のことが問題となっているのですが、歴史は繰り返すという思いをひしひしと感じます。1974年修士課程を修了し、設立されたばかりの地域振興整備公団に一期生として入団しました。2010年に地域振興整備公団を引き継いだ都市再生機構を退職（36年在籍）しましたが、現在も地域づくりを生業として続けています。地域づくりの仕事はそこに住む人々の生活を支え、未来を切り開くことで人々に喜んでいただけるもので、やり甲斐を感じています。

従事した仕事の内容

（地域振興整備公団）

1974年修士課程を修了し、設立されたばかりの地域振興整備公団に一期生として入団しました。ときは田中角栄さんの全盛期、国土庁も設立され本格的に国土開発を展開しようという空気のなかでのスタートでした。それから30年後の2004年には、行政改革のなかで地域公団は廃止、同じく廃止された都市整備公団と合併した都市基盤整備機構で働くこととなりました。企業の歴史30年とはよくいったもの、国の機関が地方で工業団地やニュータウンをつくるという仕組みは一区切りついたということなのでしょう。2010年4月に定年退職し、現在は地域づくりプランナーを生業としつつ、地域公団時代の最後にてがけた構想の実現を目指すNPO 法人アジア起業家村推進機構の常務理事と、木材商社のすてきナイスグループの監査役（社外）を務めています。

（四つの現場）



1975年、長岡ニュータウン

現役時代、4か所の現場に行きました。最初は1979年から長岡市、長岡ニュータウンの開発です。上越新幹線と関越自動車道が整備されるのを受けて人口と産業の受け皿をつくるという計画です。ちょうど通産省からテクノポリス構想が提案されたところで、長岡市の方々と一緒に構想を作り、指定第一号となりました。都市と産業の一体開発、産学官の協働というテク

ノボリス構想は、ハイテク産業が育ちつつある時代の先駆で、アジア各地の開発戦略にも大きな影響を与えたと思います。シリコンバレーの御本家米国からも大いに注目されたものでした。1991年からはいわき市でいわきニュータウンの開発に関わりまし



1992年いわきニュータウン
民謡ながしに参加
交流を深め、ニュータウンへの取り込みにも努めました。

た。IT革命が始まるころ、情報通信でいつでもどこでも仕事ができるテレワークの地方版ということで、Uターン組の会田和子さん（社長）を中心に地元の若手中堅の方々と共にいわきテレワークセンター(株)を設立しました。2001年浜松市（現在）の浜北新都市では、女性初の樹木医・塚本こなみさんの薫陶をえて、樹木の生態を学び、2005年盛岡市の盛岡南新都市では、地産地消や産直が進む中、オーガニック食品や本物食品を作り続ける東北の方々と

（地域づくり事業推進）

1998年から初代の地域づくり事業推進室長を務めました。工業団地やニュータウンといったハード主体の事業構造を変えようと、ソフト面から産業づくり、街のコンセプトづくりにチャレンジしました。途上で公団が廃止されてしまいましたが、結果としては、全国各地での地域の方々による自前の地域づくりの動きにつながっていったと思います。

（現在の仕事）

現在、NPO法人・アジア起業家村推進機構では、アジア人の起業と日本の中小企業のアジア進出を支援する仕事、すてきナイスグループでは森から住宅までのビジネスチェーンがつけられること＝林業の六次産業化の流れを見守りながら、現地とつなぐ仕事をやっています。3.11の大震災は想定していなかったできごとで、縁の深い土地のためその復興にできる限りのことをしています。SRIDの提案作業にも携わらせていただきました。原発をかかえる福島再生は大仕事、目下はそれが中心で何とかできないかいろいろの方々と策を模索中です。

国際開発とどのように関わってきたか



1990年環太平洋ルービング・セミナー

国際的な会議やプロジェクト支援にも関わりました。1990年（マレーシア）、1991年（インドネシア）の国連地域開発センター主宰の環太平洋プロジェクト・ルービングセミナーでは、アジア各国のプランナーの方々と特に工業団地と地域開発というテーマで議論しました。私はテクノポリスを

中心に考え方や実情を報告したのですが、コンビナートや工業団地からステップアップした産業新都市 (Industrial New Town) という考え方として受け止められました。その後、各国で日本以上のきれいでしっかりした産業新都市が出来上がっています。ハイテク時代の比較優位の3因子ということで、原材料の存在や(天然)港湾の存在などでなくメガインフラ、情報サービス、人材育成だということが共通の認識となったこと、地域の進化と経営という考え方を理解してもらえたことがうれしいことでした。

各地の開発支援ということでは、青島(1988年)、モンゴル(1994年)、ベトナム(1995年)に行きました。ベトナム、モンゴルでは移行経済の中、日本の工業団地やニュータウンづくりや企業誘致のやり方から公団という仕組みそのものを説明した時に、国が民間企業よりも偉いという社会主義体制において、企業にお願いして立地してもらうという考えに、始めは当惑していたのが印象的でした。

外資系企業誘致ということで、米国に2回出張したり、在日米国商工会議所の方と一緒に日本の各地を回り、立地環境について機関誌のACCJジャーナルで特集を組んでもらった(1983年~86年)のも記憶に残る仕事です。「Kaizen」や、品質管理、テクノポリスという考え方とともに、地方の文化や自然にも大変興味を示してくれました。投資交流は文化交流と一体だと思つづく思つたものです。巻頭に「Japan Location for Success」という記事を掲載させていただきました。日本の良き時代(Past Times)です。



1984年モンタナ開発

未完のプロジェクトとなってしまいましたが、その頃アメリカのモンタナ州を開発しようという構想づくりに尽力しました。モンタナ州のほぼ4分の1、8万平方キロメートルを日本の資金で開発し国際的なハイテク・コミュニティ SIGHT-C (Sophisticated International Great Heightened Technology County) を建設しようというものです。ご当地出身のマンسفールド駐日大使の縁で提案を作り大使のじきじきのご承認をいただいて始めたものですが、その後のバブルのなかで中断してしまったのは、今でも残念に思っていることです。

仕事上の苦勞と喜び

ふりかえれば、日本と世界の流れに棹差してのサーフィン感覚でいろいろやってきたなという実感で、あまり苦勞というのは感じなかったのですが、あえていえば、売れない時代に工業団地の販売をやっていたので、営業の大変さと、金利のついた資金で団地を開発することの大変さは身に沁みています。売れた時のうれしさは忘れられません。これは不動産開発や営業をなさる方みな共通ですね。

生業の地域づくりは企画から成果が出るまで*十年ということで、手がけた仕事の成果がその場で出ることはありません。中止したり、失敗することもあります。昔計画した町がきれいに仕上がっているのを見たり、創設を支援した会社がうまくいっているのを聞くのは嬉しい限りです。

地域づくりが仕事ですので、心がけたのはともかくも地域と人を知ることです。地元人に「小林さんは地元の人より地域を知っている」といわれると、お世辞でも嬉しい思いをしたものです。おかげさまで、長岡、いわき、浜松、盛岡、大阪、それぞれふるさとといえるくらいに知己を得ています。そんなこともあって、「知らない地でのコミュニケーション構築術」というタイトルで講義をすることもあります。「地域づくり」の話よりはこちらの方が役に立つようです。

私の生き方：遊歴のすすめ

自己紹介ということで、蛇足ですが最後に趣味の話。先達・下河辺淳氏の「人生四つの趣味をもて、趣味というからには2千時間以上をかけるべし」という教えを守り、いろいろやっています。並べれば、スキー、サーフィン、マラソン、ベランダ園芸、新内・・・何とか四つをクリアしています。



ゴルディック（長岡）1983年
ACCJ ジャーナルより

面白いところでは、長岡で雪の上でスキーを履いてゴルフをするゴルディックの創始（Marquis Who's Whoに創始者として掲載されています）。新内は歌舞伎座で初舞台を踏み今は富士松鶴鳳太夫として千歳派副家元就任、マラソンはエイジランナー（10キロを年齢×1分）で全都道府県走破をめざし現在32都道府県走破済・・・同好の方がいらしたら是非一緒に。地域振興ということでは、ゴルディックもそうですが、会津三島産の桐を使



2007年新内

ったサーフボード（KIRIDANCE）を開発したことや、世界一の長岡の花火を1999年の大晦日にヘルシンキに持ち込み、24時にミレニアム記念花火として打ち上げたこともご披露しておきましょう。

直近では、フランス・アルザス州・コルマールにあるアルザス欧州日本学研究所（ceeja）と盛岡の有志が協力して地方都市同士の文化・産業交流を図る盛岡・アルザス交流セミナーを二回開催しました。2年前はアルザスで南部鉄器、今年は盛岡でアルザスワインと日本酒をテーマに、大いに盛り上がりました。

福沢諭吉のころは、庶民が文化や遊びで平和に暮らしていた江戸時代から西洋流の文明開化の時代に入り、いつまでも遊び呆けていてはだめだということで「学門のすすめ」となったのですが、成熟国となったいま必要なのは文化と遊びではないか…。とって「遊歴のすすめ」と嘯いています。湘南生まれの性ですね。新内の先輩の言葉で「道楽とは道に落ちること」とか。「極めれば極道」、まだまだ先は長いです。



2000年ヘルシンキミレニアム記念花火
長岡の花火師さんたちと



1992年 いわきシーサイドマラソン